【中1】国語 文章テスト　説明文 1/2

月　日　名前　　／50点

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

「急がば回れ」「二度あることは三度ある」。ことわざを聞くと、古くさいと感じる人がいるかもしれない。たしかに、ことわざの多くは何百年も前から使われてきた言葉だ。しかし、古いということと、役に立たないということは、別の話である。

ことわざとは何か。ひとことで言えば、大勢の人の経験を、短い言葉に押し縮めたものだ。急いで近道を選び、かえって遅くなった人は、昔から数えきれないほどいただろう。その一人一人の失敗を、いちいち長く語っていたら、伝えるのに時間がかかる。そこで、「急がば回れ」という七つの音に押し縮めた。短いから覚えやすく、覚えやすいから、次の世代へ渡すことができた。

ここで大切なのは、ことわざが「答え」ではなく「注意」だということだ。「急がば回れ」は、いつでも遠回りをしろと命じているわけではない。急いでいるときほど、人は判断を誤りやすい。そのことを、耳元でささやいてくれる言葉なのである。判断そのものは、その場の自分がするしかない。

だから、ことわざには、たがいに反対のことを言うものがある。「善は急げ」と「急がば回れ」は、正反対に見える。しかし、どちらも間違ってはいない。ためらっているうちに機会を逃す人もいれば、あわてて失敗する人もいる。二つのことわざは、その両方の危なさを、それぞれ覚えているのだ。どちらを思い出すべきかは、その時の状況が決める。

道具にたとえるなら、ことわざは古い定規のようなものだ。定規は何も決めてくれない。しかし、線を引く前に当ててみると、まっすぐかどうかが分かる。古い言葉を、自分の今の判断に当ててみる。そのときことわざは、古い道具ではなく、現役の道具になる。

（この問題のための書き下ろし）

問一（十点）　筆者は、ことわざとは何だと述べていますか。「～もの」につながるように、本文中から二十字以内で抜き出しなさい。

問二（十点）　「短いから覚えやすく、覚えやすいから、次の世代へ渡すことができた」とありますが、この一文の役割として最も適切なものを、次のア～エから一つ選びなさい。

ア　ことわざが短い言葉になった理由と、その結果を順に示している。
イ　ことわざを覚えるのが難しいことを、読者に注意している。
ウ　昔の人が失敗を語らなかった理由を説明している。
エ　短い言葉より長い説明のほうが伝わることを示している。

問三（十点）　「ことわざが『答え』ではなく『注意』だ」とありますが、「急がば回れ」はどんなことを注意している言葉だと筆者は述べていますか。「～ということ」につながるように、本文中から二十字以内で抜き出しなさい。

問四（十点）　「善は急げ」と「急がば回れ」が正反対に見えるのに、筆者が「どちらも間違ってはいない」と言うのはなぜですか。四十五字以内で説明しなさい。

問五（十点）　筆者がことわざを「古い定規」にたとえた理由として最も適切なものを、次のア～エから一つ選びなさい。

ア　定規のように、正しい答えを一つに決めてくれるから。
イ　定規は古くなると使えなくなるように、ことわざも役に立たなくなるから。
ウ　定規のように何も決めてはくれないが、自分の判断に当ててみると、ずれに気づけるから。
エ　定規のように、学校で必ず習うものだから。

月　日　名前

／50点

合計　／100点

【中1】国語 文章テスト　物語文 2/2

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

祖父の家の机には、いつも一本の万年筆が置いてあった。黒い軸に、金色の細い線が一本入っている。子どものころ、私はそれをさわらせてもらえなかった。「これはおじいちゃんの仕事の道具だから。」祖父はそう言って、引き出しにしまった。

祖父は長いあいだ、町の小さな印刷所で働いていた。人の書いた文字を、機械で刷る仕事だ。「人の字を刷るのが仕事なのに、自分の字は下手でね。」祖父はよく笑いながら言った。それでも、手紙はいつも万年筆で書いていた。

中学に入った春、祖父が入院した。見舞いに行くと、祖父は私に、あの万年筆を差し出した。

「もう、手が震えて書けんから。」

私は受け取れなかった。受け取ってしまえば、祖父がもう手紙を書かないと認めることになる気がした。「退院したら、また使うでしょう。」私がそう言うと、祖父は少し黙ってから、万年筆を枕もとに置いた。

夏の終わりに、祖父は退院した。手の震えは残ったが、元気にはなった。私は、あの万年筆のことを、それきり口にしなかった。

秋になって、私は学校の作文で賞をもらった。祖父に見せに行くと、祖父は作文を読み終えてから、引き出しを開けた。出てきたのは、あの万年筆だった。

「これで、名前を書いてみなさい。」

私は、作文の表紙の名前の横に、もう一度自分の名前を書いた。ペン先が紙をひっかく音がした。字は、少し曲がった。

「下手だな。」祖父は笑った。「おじいちゃんに似た。」

私は、万年筆をそのまま持って帰った。今度は、受け取れた。祖父が渡したかったのは、書けなくなった道具ではなく、書く人を続けてほしいという気持ちだったのだと、その時になって、やっと分かったからだ。

（この問題のための書き下ろし）

問一（十点）　「私は受け取れなかった」とありますが、その理由を「～から」につながるように、本文中から四十字以内で抜き出しなさい。

問二（十点）　「祖父は少し黙ってから、万年筆を枕もとに置いた」とありますが、このときの祖父の気持ちとして最も適切なものを、次のア～エから一つ選びなさい。

ア　私に断られて腹を立て、二度と渡すまいと決めている。
イ　私の気持ちを察して、無理に渡すのをやめ、時を待つことにしている。
ウ　退院できると言われて、すっかり安心している。
エ　万年筆をどこに置けばよいか迷っている。

問三（十点）　「私は、あの万年筆のことを、それきり口にしなかった」とありますが、その理由として最も適切なものを、次のア～エから一つ選びなさい。

ア　万年筆にもう興味がなくなったから。
イ　祖父が元気になったので、万年筆をもらう必要がなくなったから。
ウ　万年筆の話をすると、祖父が書けなくなったことに触れてしまう気がしたから。
エ　祖父が万年筆をなくしてしまったから。

問四（十点）　祖父が万年筆を渡すことで本当に伝えたかったものを、「私」は何だと分かりましたか。「～という気持ち」につながるように、本文中から十五字以内で抜き出しなさい。

問五（十点）　春には受け取れなかった万年筆を、秋には「受け取れた」のはなぜですか。「私」の変化が分かるように、五十字以内で説明しなさい。